

ヒト型ロボ

ヒト型ロボットは、赤ちゃんにどう受け入れられるか。米カリフォルニア州の保育園でこんな実験が始まった。主人公はソニーのヒト型ロボット「QRIO(キュリオ)」、身長58センチ。ソニー・インテリジェンス・ダイナミクス研究所のリサーチャー田中文英さん(31)に連れられて、3月から毎日1時間、クラスの1員として教室に通っている。

(富岡史穂)

赤ちゃん

共生できる？

この保育園は、カリフォルニア大サンディエゴ校の付属施設。同校のハビア・モベラン博士(認知科学)と田中さんの共同研究だ。テーマは、ロボットが子供を飽きさせ

と、助け起こそうとする子もいる。「おもちゃでも人間でもなく、大人の言葉では表現できない存在になっている」と田中さん。赤ちゃんの発達に詳しい京大の板倉昭二助教授(比較認知発達科学)は「ヒトは3カ月過ぎれば、相手が人間か、そうでないか区別できる。キュリオを助け起こした子は、人間ではないが親しみを感じる相手とみているようだ。そういう認識の発達過程が、実験で分かってくるかもしれない」と話す。

友達なれるかな



ソニー研究者 米の保育園で実験

ないために必要な条件。人間社会に溶け込みやすいロボット開発の研究にもつながる。

クラスメートは10カ月から2歳前後まで10人余り。キュリオが教室デビューするときは、怖がられないように電源を入れずに、田中さんが抱いていった。現在も安全性を考へ、田中さんがマジックミラー越しの別室に待機し、場合によって遠隔操作に切り替える。

一緒にダンス

当初は怖がっていた子どもたちだが、今は大はしゃぎで一緒にダンスに興じる。キュリオが転ぶ

実験を通じ、田中さんは日々、赤ちゃんの笑顔の魅力と成長の早さを再認識している。「子どもに負けないようにキュリオを発達させたい。それを必ず、子どもたちの幸せにもつなげたい」